



Title	補文としての不定詞句「DE+不定詞」とその周辺 : 『ドン・キホーテ』(正篇)の場合
Author(s)	中岡, 省治
Citation	Estudios Hispánicos. 1998, 22, p. 1-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93831
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

補文としての不定詞句「DE + 不定詞」とその周辺 —『ドン・キホーテ』(正篇)の場合—

中 岡 省 治

1. 問題の提起

これまで、セルバンテスの作品をいくつか読んできたが、それを通じて、そこには、中世イスパニア語と近代イスパニア語の言語事実が、巧みに組み合わされて現われていることを教えられた。ことばの時間・空間にわたる連続性を考えれば、これもしごく当然のことであるが、以下ではそのうちでも、中世語と近代語との大きな違いとしてとらえられる一現象を中心に、いわゆる黄金世紀に、イスパニア語が近代語に向かってどのような動きをみせてるかを観察してみたいと思う。

ここで取り上げる言語事実は、補文の一形式として、中世語の特徴的な統語形式で、16・17 世紀でもいまだに多用されたといわれる不定詞句、《De + 不定詞》である。これは、近代イスパニア語では、原則として、単独の不定詞が他動詞の直接補語として、名詞句の機能を与えられて用いられる場合に当たる。つまり、*determinó comprarse un piso*「彼はアパートを一つ買うことに決めた」の *comprarse un piso* が、中性代名詞の *lo* によって、*lo determinó* (あるいは、*determinó hacerlo*) に書き換えられる場合に当たる。以下では、この《De + 不定詞》が『ドン・キホーテ』(正篇)(以下『ドン・キホーテ』とする)ではどのような分布をみせているかをさぐり、あわせて、それと関連すると思える現象についても言及しようと思う。

1. 1. 16 世紀のイスパニア語には、次の文にみられるような、《De + 不定詞》(以下、《De + Inf.》とする)の補文が存在した。これは、補文形式の一つとして、他動詞の直接補語として現れる単独の不定詞に並んで、

その自由変異形として《De + Inf.》があった、ということを意味している。

- (1) En este tiempo, (...), procuró casarme con una criada suya. Y visto por mí (...), *acordé de lo hazer*. 「このときに、彼は彼の女中の一人と私を結婚させようと企てた。私はそれを知って、そうしようと決めた」 (L. Tormes., p. 234) (注1)

- (2) Señor, le dixe, yo *determiné de arrimarme* a los buenos. 「ご主人様、私は正しい人達に肩入れすることに決心しました、と私は彼にいった。」 (Id., p. 239)

これは、それぞれ次の不定詞単独の補文に対応している。つまり、イスパニア語を通時的に見た場合には、以下の(3), (4) に対して(1), (2) は、前置詞 *de* によって有標化された形式、ということになる。

- (3) con doscientos caballos *acordó pasar* aquella noche a reconocer la vitualla. 「二百頭の馬を引いて、彼はその夜に装備の様子を調査に出向くことに決めた」 (Cuervo, I, p. 140)

- (4) *Determinó* [Herodes] *matar* todos los niños que había en la tierra de Bethlehem. 「ヘロデ大王はベツレヘムにいる幼子みなを殺そうと決心した」 (Cuervo, II, p. 1200)

1. 2. この現象についての諸家の見解.

a) 上記の《De + Inf.》の機能そのものに直接言及して、これを説明しようとする当時の記録はほとんどない。しかし、仮に、この形式を文の要素として働く不定詞の役割を明示化するための手段であるとすれば、これは当然のことながら、古典語文法の特徴の一つであった格形式を連想させたであろうと思われる。これに関係する記述には、たとえば、Antonio de Nebrija (1492) の次のような場合がある。

Declinación del nombre no tiene la lengua castellana, salvo del número de uno al número de muchos; pero la significación de los casos distingue por preposiciones. (ed. Antonio Quilis, p. 188) 「一つの数と多くの数の曲用を除いては、カステイリャ語は名詞の曲用をもたない。しかし、カステイリャ語は格の意味作用を前置詞によって区別している」

すでに形態論からみてラテン語的な格変化をもたなかった時のカステイリャ語にも、ラテン語文法の格範疇の概念を取り入れて、ここに前置詞の作用を加えて、それと名詞との組み合わせで、かつての格範疇に類似の機能が得られるとするのは、カステイリャ語文法成立の過程を考えても当然のことであろう。もし、この考え方によって上記の二文に現れた《De + Inf.》の格を決めるとすれば、これは「対格」となり、文構成の上からは補文として位置付けられる。なお、16・17世紀の文法書では、名詞、代名詞にラテン語的な格範疇を設定して、疑似格変化のような変化表を挙げるのが、ほぼ慣習となっていたようである（注2）。

b) この《De + Inf.》そのものに直接に言及しているのが、以下に挙げる Juan de Valdés (1535) の場合である。彼は、《creo que será bien hazer esto》「私はこれをするのがいいだろうと思う」の que が “superfluo” 「余計である」といったその後で、次のように述べている。

Como también en un *de* que se pone demasiado y sin propósito ninguno, diciendo *no os he scritto, esperando de embiar*, adonde staría mejor, sin aquel *de* dezir *esperando embiar*. (ed. José F. Montesinos, p. 156) 「同じように、不要なものでまた何の目的もなしに付けられる *de* も余計で、これは *no os he scritto, esperando de embiar* “使いをやろうと思っていて、あなた方には手紙を出さなかった” という場合だが、そこでは、その *de* を外して、*esperando embiar* といった方がずっとすっきりすることであろう」

引き続いて、以下のようにもいっている。

Hablar o escribir de suerte que vuestra razón pueda tener dos entendimientos, en todas lenguas es muy gran falta del que habla o escribe (Id., p. 157) 「あなた方の発言が二つの解釈をもちうるような。そんな話し方、書き方を

するのは、あらゆる言語において、話したり書いたりする人の大きな欠点である」

もちろんこの後半の部分の記述は、“esperando de embiar” 以外の形式も含んだ、一般的な注意であろうが、《De + Inf.》を対格、直接補語と解釈する以外に、どのような意味形成の可能性を Valdés は考えていたのであるか。

c) 時代が下って19世紀に入ると、すでにこの補文形式は後退してしまっているのが分かる。たとえば, Vicente Salvá (1830) は次のようにいっている。

Notaré aquí, (...), que en nuestros autores clásicos se halla con frecuencia la preposición *de* tras de verbos que no requieren ninguna, como cuando leemos: *Ahorraréis del trabajo, concertó de esconderse, determinó de irse, resolvió de buscarlo, hacía de señas, juró de arrancarle la lengua, procura de ser bueno, prometió de visitarle, propuso de hablarle*, etc., o bien después de verbos que al presente piden otras preposiciones, así: *Comenzar de herir* por *Comenzar a herir*; *Ofrecerse de proseguir* por *Ofrecerse a proseguir*, *Quedó de hacerlo así* por *Quedó en hacerlo así*, etc.; pero ninguna de estas locuciones es digna de imitación (ed. M. Lliteras, II, p. 539) 「私はここで以下のことを指摘しておこう。つまり、イスパニアの古典期の作家の作品では、*ahorraréis del trabajo* 「おまえ達は手間を外いて仕事をしなさい」、*concertó de esconderse* 「彼は隠れることに決めた」、*determinó de irse* 「彼は立ち去ろうと決心した」、*resolvió de buscarlo* 「彼はそれを探そうと決意した」、*hacía de señas* 「彼は合図をした」、*juró de arrancarle la lengua* 「彼はその男の舌を引き抜いてやると誓った」、*procura de ser bueno* 「おまえいい子でいるようにしなさい」、*prometió de visitarle*, 「彼はその人を訪ねると約束した」、*propuso de hablarle* 「彼はその人と話しをしてみようと提案した」のように、何ら前置詞を必要としない動詞の後ろにまで、しばしば前置詞 *de* が現われたし、あるいはまた、*Comenzar a herir* に代えて *Comenzar de herir* 「攻撃を始める」、*Ofrecerse a proseguir* に代えて *Ofrecerse de proseguir* 「引き続き行うことを申し出る」、*Quedó en hacerlo así* に代えて *Quedó de hacerlo así* 「彼はそうしようと話しをまとめた」などにみえるように、今日では他の前置詞を要求す

る動詞の後にも、しばしば、前置詞の *de* が現われることである。しかしこれらの言い方の何一つとして真似て使う価値はない」(注3)。

d) H. Keniston (1939) :

The sixteenth century, while preferring the simple infinitive for all usages except that of complement to a verb, preserves throughout the century the use of the infinitive with *de* in every variety of substantive construction. In the field of verbal complements, the most complete confusion exists. Save for a few modal auxiliaries, almost every verb may be found construed with a direct infinitive and with one or another preposition. (*The Syntax of Castilian Prose*, p. 513)

Keniston は、上のように述べた後で、この不定詞の現象の中から、特にその直接補語として《De + Inf.》を選択できる動詞60余例を例示している。

e) R. J. Cuervo (1994) :

Se construyen con *de* verbos que traen la idea de un sust. que admite un compl. determinativo formado con esta partícula; así, *graduar de* = *dar el grado de*; *notar de* = *poner la nota de*. 《Todos se gradúan de doctores y bachilleres, licenciados y maestros, más por los mentecatos con quien tratan que por las universidades.》 Quev. *Visita* (R. 23. 340). (...) Es de creerse que la analogía de frases como *hacer juramento*, *propósito*, *formar el designio*, *tomar la resolución*, etc., que naturalmente admiten por compl. un infin. con *de*, ha ocasionado el empleo del mismo complemento con los verbos *jurar*, *proponer*, *resolver*, *acordar*, etc. Esta construcción fue comunísima en los siglos XVI y XVII, y hoy se miraría como galicismo. (*Diccionario de Construcción y Régimen de la L.C.*, II, p. 789, 15)) 「前置詞 *de* によって構成された限定補語を受け入れる名詞の概念を含む動詞は、この前置詞 *de* を伴う構造をとる。従って、*graduar de* = *dar el grado de* “の資格を与える”, *notar de* = *poner la nota de* “の覚え書きをする” ということになる。《Todos se gradúan de doctores y bachilleres, licenciados y maestros, más por los mentecatos con quien tratan que por las universidades. 「みなは博士や得業士、学士や教師の称号をもらっているが、これらも大学から得たというのではなく、彼等が付き合う愚者どもから与え

られたものである》Quevedo, *Visita*. (...) 信じてしかるべきは, *hacer juramento*, propósito「誓いをたてる, 目論みをする」*formar el designio*「計画を立てる」, *tomar la resolución*「決意をする」などは, もちろんのこと, *de* を伴った不定詞を補語として受け入れるが, これらの動詞句への類推から, その同じ補語が, *jurar*, *proponer*, *resolver*, *acordar* などの動詞とともに使われるという事態を招いた, ということである. この構造は16・17世紀にとってもよく用いられたが, 今日ならば, これはフランス語的な言い方と見なされるであろう」

これに加えて, *Cuervo* は個別の動詞の項目でも, その直接補語になる不定詞について, 随時の記述をしている (Según la sintaxis de los siglos XVI y XVII, a menudo se antepone *de* al infinitivo. *Cuervo*, I, p. 140, ACORDAR「16・17世紀の統語論では, しばしば *de* が不定詞に前置された」)

1. 3. 補文を《*De + Inf.*》で表わす現象は, すでに, 早くから, 中世スペイン語に記録されている。一方, この現象に関する記述のうちで, 次の二つが我々には興味深いと思われる。

a) M. de Unamuno(1977) :

El *de de compeçar y penssar* parece tener origen nominal. Vemos, por ejemplo, que de frase tal que *dellas e de mi muger fagades todo recabdo* 357, se originó *recabdar de*, del mismo modo de *compieço de tal o cual cosa*, *pensso de* (pesamiento de) se originaron *compeçar de y penssar de*. Perdido más tarde el sentido nominal de estos verbos se asimilaron a los demás construyéndose con *a* o sin preposición. (*Gram. y Glos. del Poema del Cid*, p. 272) 「*compeçar* や *penssar* が要求する *de* は名詞的な起源をもっているように思われる。たとえば, 我々の考えるところ, *dellas e de mi muger fagades todo recaudo* (*Cid*, 357) “彼女たちや私の妻のことにあなたは十分に気を配ってやっていたきたい” から, *recabdar de* “の世話をする, に気を配る” が生じ, これと同様に, *compieço de tal o cual cosa* “あれやこれやことの始まり”, *pensso de* “の思い (の考え)” から, *compeçar de* 「を始める」, *penssar de* 「を考える」が生まれたのであった。その後になって, これらの動詞からその名詞的意味が失われ, これらの動詞はその他の動詞に同化して, *a* とか前置詞なし

の構造をとることになった」

ここで興味をひくのは、de を伴う不定詞を直接補語としうる動詞を記述するにあたって、Unamuno は、現代の文法理論でいう成分分析的な接近法を試み、その de の存在を説明しようとしていることである。このように、抽象動詞を設定して、そこに動詞の意味構造を求め、それに基づいて個々の動詞に現れる統語上の特徴を説明しようとする方法は、非常に斬新な考え方であったといえるであろう。これは、esperar がそれに対応する分析形 tener esperanza de への交差、あるいはそれへの類推から、余剰的な de を従え、たとえば、espero de conseguirlo 「私はそれを入手できるものと期待している」といった構造が発生した、とする表面的な類推説とは、本質的に違っているといえる。ただし、この Unamuno の説によれば、《De + Inf.》という機能単位の設定は不可能になってしまう(注4)。

b) Cano Aguilar (1977-78) : 中世スペイン語では、entender mis dichos e pensar la sentençia, pensar en la religión, pensar de mi amor が同じ意味の関係を表わすことができたという前提のもとに、次のようにいっている。

(;) la alternancia de regímenes, entre sí y con el transitivo directo, muestra que las preposiciones ya no tienen sentido por sí mismas, y que en todos los casos nos hallamos ante complementos de objeto.(p. 348)

Las alternancias de construcción de estos verbos pueden deberse en ocasiones al diferente entorno sintáctico que constituye su complemento: es decir, si éste es un sustantivo, un infinitivo o una oración con verbo en forma personal. En estos casos nos hallaríamos ante variedades condicionadas por el entorno categorial y, por tanto, con una misma invariante de contenido en cuanto a la función semántica del complemento. (pp. 363-364) 「被制辞相互間の交代や直接に補語を要求する他動詞との間での交代から明らかになるのは、もうすでに前置詞がそれ自体の意味をもたないこと、また、これらすべての場合において、我々は目的語としての補語を目前にしている、ということである。」

「これらの動詞がみせる構造の交代は、時には、その補語を構成する様々な統語環境に起因することもありうる。つまり、この補語が名詞なのか、不定詞か、それとも動詞人称形を伴う文か、ということである。これらの場合、

我々は範疇の環境によって条件付けられた異体を、従って、補語の意味的機能に関していえば、一つの同じ内容の不変体の異体を、目前にしているのである。」

このような説明の後に、彼は次のような同一動詞の間での被制辞の交代現象を例示している。

- (6) (...) omnes de corte que *ssabían* bien *de* trobar e cantar, e de joglares que *ssopiesen* bien tocar estrumentos. (Setenario) (Cano Aguilar, 1977-78, p. 364) 「巧みに歌を詠みまた歌うことのできる宮廷人と、巧みに楽器を奏でることのできるであろう旅芸人のなかから」

同一の動詞の場合でも、以下の二文のように、異なる統語上の輪郭に対応して異なる統語現象が現れる場合、を見いだすことができる。

- (7) (...) les *prometien* de parte de aquel rey que les dará buen galardón por los peligros et trabajos ... (L. Estados., p. 120) 「彼等にはその王からの言葉として、彼等が出会う危険と難儀とに対して十分な褒美をとらせるとの約束がなされた」

- (8) (:) [et] otros [ha a qui] aquel rey mismo *prometie* villas et castiellos ..., et *prometie* de gelas dar por tal quel sirvan, ... (Id., p. 120) 「その王自身が町や城を与えると約束した人々や,... その奉公の程度に応じてそれらを与えると約束した人々が、他にもいる。」

2. 中世イスパニア語における《De + Inf.》出現状況.

以下ではその補文の一つの形式として不定詞があり、その不定詞に対する自由変異形として《De + Inf.》がある、そうした特性の動詞を取り上げる。これらの動詞は、いうまでもなく、その補文として、不定詞以外に、名詞（同等語句）や *que*, *como* などに導かれる名詞節の双方を、あるいはそのうちのどちらか一つ、を従える可能性をもつものである（この動詞抽出に当たっては、Serradilla Castaño, 1996）を参照して、本校末尾に挙げた中世イスパニア語のテキストから用例を採取した）。

2. 1. 《De + Inf.》が直接補語になる場合.

**aborrecer : espantauanse todos et aborrecien de oyr hablar de tan estran-
no comer. (P. C. G., p. 135, b)**「みなは驚いて, そんな奇妙な食べ物のこと
を人が話すのを聞くのを嫌がった」

**acabar : mas desauenturadas [orejas tuyas] de que me acabes de oyr.
(Celestina I, p.33)**「おまえが私の言をすっかり聞いたら, おまえ [の耳] は
むしろ不運なことになることだろう」(注5)

**acordar : et acordaron de levar una vestia en que lo traxiesen. (C.Lucanor,
p. 64)**そこで彼等は彼を乗せてくる動物を引いて行くことに決めた」

**acostumbrar : como algunos han acostunbrado de lo asý fazer. (Corbacho,
p. 85)**「一部の人々はそれをそのようにすることに慣れてしまっているので」

**amar : et aman más de fazer las obras de Dios que las de los omnes.
(Calila, p. 183)**「彼等は人間の所業よりも神の御業を行うことの方を願って
いる」

**aprender : aprende de guardar toda tu pudicicia e sobrar e vencer los
apetytos defrenados de la dicha carne mesquina, (Corbacho, p. 70)**「お
まえはその慎みのすべてを守り, その卑しい肉のたがの外れた欲望を抑え, そ
れに打ち勝つことを覚えよ」

**asmar : Por ende asme de conponer este tractado que tracta de las cosas
... (C. Lucanor, p. 84, nota)**「そこで私はそれらのことを扱ったこの小論を
書くことを思いついた」

**cesar : Agora, señora, tiénele derribado vna sola muela, que jamás cesa
de quejar. (Celestina, I, p. 186)**「奥方様, 彼は一本の奥歯のため参ってお
ります. その歯はうずきがやんだことがございません」

cobdiciar : et la tercera [manera] cobdiciar de fazer bien. (Calila, p. 95)
「第三番め [になすべき] は善を行うことを願うことである」

começar : e quando compeço de sumurguiar, (S. Mateo, XIII, 30) 「彼が下に沈み始めたときに」 (comenzar: las manos e todo el cuerpo pierden todo su exersycio que tenían e comiençan de tenblar. (Corbacho, p. 52) 「手や全身はかつてもっていた運動能力を失い、ぶるぶる震え始める」)

curar : Non cure, pues, ninguno de dezir: (Corbacho, p. 209) 「人誰といえこんなにいおうなどとは考えるな」

cuydar : Cuydo toda Castyl[e]lla de rrobar e correr. (Poema de Fernán González, 281 d) 「彼はカステイリャ全土を略奪し荒らしまわろうと考えた」

denegar : et denego de enviarles ayuda. (C. G. E., p. 679, a) 「彼は彼等に援助を送ることを拒絶した」

desconfiar : Yo ya desconfiaua de la poder alcançar, (Celestina, I, p. 246) 「今では私は彼女を手に入れられることはおぼつかなかった」

desear : El infante don Ramiro entró en religión, desseando morir pobre, (Cuervo, II, p. 1043) 「皇子ドン・ラミロは、貧しく死ぬことを願い僧籍に入った」(注6)

desesperar : Non desesperen de melecinar su falcon con los que este libro tovieren. (Alonso, II, p. 918) 「彼等がこの本をもってあろう人々の教えに従い、鷹に施薬をすることをためらわないように」

determinar : E assi ella determinó de gaurdar castidad. (Alonso, II, p. 947) 「そうして彼女は純潔を守ろうと決心した」

dexar : las quales omito e dexo de dezir por non ser prolixo e avisador de mal fazer. (Corbacho, p. 93) 「そんな手口は省いていわないでおきますが、これはくどくどしくならぬため、また悪事をせよと教えるようなことにならぬため」(注7)

dudar : este tal non dubdará de cometer toda maldad (Id., p. 56) 「このような人間はなんら疑うことなく、あらゆる悪事を働くだろう」

enfingir : todas las cosas ynfingen de fazer como muger, dexando su usar varonil. (Corbacho, p. 237)「彼等は、自分たちの男のしぐさを捨てて、女のように見せかけてすべてのことをしようとする」

entender : Escribió ... que él entendía de ir luego en persona a le dar la batalla. (Cuervo, III, p. 559)「彼はすぐさま、彼自ら相手に戦いを仕掛けに出向くつもりだ、と書き送った」

esperar : simpleza es no querer amar e esperar de ser amado, locura es pagar el amistad con odio. (Celestina, I, 234)「愚かなことは、愛したいと思わずして愛されたいと期待すること、狂気なるは、友情に憎しみでもって報いること」

estudiar : Estudia, mientras vo yo, de le dezir tu pena (Id., p. 59)「私が出かけている間に、彼におまえの苦しみを打ち明けられるか試してみなさい」

excusar : non podeades nin deveades excusar de tomar la nuestra ley de los christianos. (L. Estados, p. 137)「あなた方は我々キリスト教徒の教えを受け入れることを避けられないし、また避けるべきでもない」

gozar : agora gozan de llegar a tu gentil cuerpo. (Celestina, II, p. 118)「今や彼等はおまえの豊かな肉体に触れられるのを喜んでいる」

guisar : que guisedes de sacar al rey, vuestro padre, et a todos los de la tierra, del yerro en que están, (L. Estados, p. 145)「あなたは、あなたの父上の王様とこの地の人みなを、今彼等が陥っている過ちから連れ出す準備をするように」

gustar : quien gusta de estar enfermo y anda procurando la enfermedad (Cuervo, IV, p. 816)「病氣でありたいと欲して、病氣を捜し求めている者」
(注8)

holgar : porque holgué mas de consentir sus necedades, que castigar su yerro, (Celestina, I, p. 180)「というのは、私は彼の過ちを罰するよりも、彼の愚かな行為を勘弁してやることをよしとした」

huir : Huye de tirar cozes al aguijón. (Id., p. 118) 「おまえ、強いかなわぬ者に立ち向かうことはやめておけ」

jurar : juraron [a] algunas de las tomar por mugeres, (Corbacho, p. 89) 「彼等は何人かの女性に、彼女達を妻にすると誓った」

merecer : Paulina, (...), que merecist de yazer el dios Anubis contigo, aprende de dar tu cuerpo a los omnes cuemo fezist a los dios, (P. C. G., p. 113, a) 「パウリナよ、おまえは神アヌビスと一緒に寝たほどの値打ちのある人だから、おまえが神にしたのと同じように、人間にもおまえの体を与えるように努めなさい」

negar : No niega sant Pablo dezirse con verdad de Eva y de Adán aquello: Y serán una carne los dos. (Cuervo, VI, p. 743) 「聖パウロは、エバとアダムのあのことが真実をもって語られていることを、否定してはいない。つまりその二人は生身の人間なのである」(注9)

olvidar : pídivos por merçed que non olvidedes de me guardar de daño. (L. Estados, p. 88) 「私は、私を災いから守ることを忘れないよう、あなたにお願いをいたします」

ordenar : El Maestre ordenó de ir derecho con toda la gente a la puerta (Cuervo, VII, p. 181) 「騎士団長はその手勢を引き連れまっすぐに門にまで行くことに決めた」

osar : ¿dó te vino osar de escrebir ni hablar de aquellas ? (Corbacho, p. 280) 「おまえは大胆にも彼女達について書いたり話したりしようなどと、どこから思いついたのか」

pensar : ¿Cómo has pensado de fazer esta piedad? (Celestina, I, p. 58) 「おまえはなぜこのような慈悲の行為をしようと思ったのか」

probar : Pero prueba de sacar dél un pelo, (Corbacho, p. 104) 「しかしおまえは彼から一本の髪の毛でも抜こうと試してみろ」

procurar : pues él non procuró de nacer en aquel mal sygno, (Id., p. 212)「というのも彼はそんな悪い運勢の許に生まれようと努めたのではなかった」

prometer : et prometíe de gelas dar por tal quel sirvan, (L. Estados, p. 120)「彼は、彼に仕えるその程度に応じて、褒美をとらせると約束した」

proponer : la qual yo propuse de fazer a servicio del muy alto Dios (Corbacho, p. 251)「私はそのことを、いとも崇高なる神への奉仕として行なおうと思い立った」

pugnar : por tal que se guarde de aver daño, et pugnar de obrar el pro; (Calila, p. 141)「彼が損害を被ることを避け、利益を得られるよう努めるために」

querer : et quiso por su merced de mostrar esta gran coyta por quien era. (P. C. G., p. 450, b)「彼は優しい人だったので、その慈悲心からこの大きな悲しみの気持ちを表わすことにした」(注10)

recelar : Jamás la pasión recela / mi corazón de sufrir; / Nunca descana en dormir / ... (Cuervo, VIII, p. 14)「煩惱は私の心が苦しむことなど / 構いはしない、 / それは眠りのなかでも休むことがない/...

refusar : que bien las rehusaba de traer, porque me parecían para huyr muy pesadas. (Celestina, II, p. 89)「よくぞ私はそれらをもって来るのを拒んだこと、それが私には逃げるときに重い荷物になると思えたので」

sufrir : Entonce Paulina suffriol de fazer quanto sel quiso, et otro dia uinosse much alegre pora su marido, (P. C. G., p. 113, a)「そのときパウリナは、自ら彼のためにしたいと思ったことを耐えて行ない、日を改めてとても喜んでその夫のところに帰ってきた」

temer : No tema tu merced de se descobrir a este cautiuo de tu gentileza. (Celestina, II, p. 82)「あなた様、その美しさの虜になっているこの男に、そのお姿を見せることを恐れられるな」

vedar : e que lo non vieden de sacar daqui adelante. (Cuervo, VIII, p. 869)

「彼等が、今から先ここからそれを持ち出すことを、禁止しないように」

votar : un cavallero votó al vero palo, sy sopiese morir en la demanda, de la provar por vía de requesta, (Corbacho, p. 122) 「一人の騎士が、決闘で死ぬようなことになっても構わない、彼女に言い寄って彼女を試してやろうと、堅く誓った」

2. 2. 《De + Inf.》が主語として用いられる場合.

acontecer : que por su ventura le avía de contesçer de llegar aí. (Calila, p. 124) 「彼は、幸運に導かれ、そこに行き着くはずであった」

convenir : pero entendió que convenía a él de saber más destas razones (L. Estados, p. 84) 「しかし彼は、自分にとってはこれらの話をもっと詳しく知るのがいいと思った」

complir : et porque non cunple de dar espaçio nin vagar a esto, darvos he a entender (Id., p. 140) 「これを引き延ばしたり遅らせたりするのは適当でないので、私はあなたに教えておこう」

pesar : Quando sus dolores me dezían ; cuántas vezes de ser fermosa me pesaua ! (Cuervo, VII, p. 451) 「彼等が私にその苦しみを語ったときに、私は美しいことで何度悲しい思いをしたことか」

plazer : e ella que le plogo de lo faser. (Corbacho, p. 80) 「彼女にはそれをするのが嬉しかったので」

2. 3. 《De + Inf.》が特定の動詞句において直接補語に用いられる場合.
(注11)

tenet por bien de las emendar. (L. Estados, p. 73) 「あなたそうしたことを改めるのがいいことだと考えなさい」

Ca tanto quanto enpeçe, si a por costunbre de fazer sus fechos en guisa que sean con deservio de Dios (Id., p. 79) 「もし彼が、神のご意向に逆らうような仕方で自分の行ないをするのを習慣にしているのならば、それだけ

及ぶ害毒も大きくなるからである」

Tengo por seso, pues así es, de me obligar a la ley de mios padres. (Calila, p. 111)「私は、まさに思慮あることとして、私の両親の信仰に従うべきだと思っている」

2. 4. 《Es + 名詞・形容詞 + 不定詞》構文において、不定詞に代わって《De + Inf》が用いられる場合.

que es grant atrevimiento o mengua de seso de en[t]remeterme yo a hablar en tan altas cosas, (L. Estados, p. 73)「専横いや愚かな所行は、私がそんな崇高なことについて語ろうと思ひ立つことである」

mas a ti es de menester de buscar con quien salgas desto en que eres caído. (Calila, p. 185)「しかしおまえに必要なのは、落ちてしまったところからはい出してくるのに力を貸してくれる人を捜すことだ」

ca entendió que era mejor de lo preguntar más en poridad a Turín, (L. Estados, p.81)「というのは、彼がトゥリンにそれをなお内密に尋ねることのほうがいいと、理解したからであった」

Sé, empero, cierto, que de non saber sería ynposyble. (Corbacho, p. 50)「しかしおまえがしっかと知るべきは、それを知らないでいようなど不可能だろう、ということである」

mas agora non es para se dezir lo que onbre vee, que sería vergonçoso de contar. (Id., p. 43)「しかし今は人が目にするををいったりするためのときではない。それを口に出すなどとは恥ずかしいことなので」

Et es así commo la piedra pesada que es muy grave de alçar et de la tener, et es muy rafez de la derribar et dexas caer. (Calila, p. 127)「またそれは、持ち上げてもずっと持ち続けているのがとてもむずかしく、しかもまた、すぐに手を放して落してしまうような、そんな重い石のようなもの」(注12)

et cómo deven bevir et mantenerse las gentes unos con otros, et otras

cosas muchas que serían muy buenas de poner en este libro. (L. Estados., p. 114)「人々がどう生きお互いにどのように助けあうべきか、また、この本に書くのが適切このうえもないその他の多くのことごと」

3. 対極的現象としての de の非出現.

近代イスパニア語の統語法を基準としていえば、《De que +文》となつて、前置詞 de が期待される構造で、中世語ではその de を削除ししていた。この現象を「De の非出現」と呼んでおく。

3. 1. 動詞がその補語導入要素としてもつ de の非出現.

Turín, mucho me marabillo desto que dizedes, (L. Estados, p. 82)「トゥリンよ、私はあなたのいっていることにととても驚いた」

no me marauillo que haya peruertido su costumbre (Celestina, II, p. 9)
「私は彼がそのいつものやり方を逆にしたとしても驚かない」

temio se de ir alla (San Mateo, II, 22)「彼はそこにいくことを恐れた」

ca se temie quel podrie ende uenir periglo (Alfonso X, p. 107)「彼はそのことから自分に危険が及ぶのではないかと恐れた」

3. 2. 形容詞がその補語導入要素としてもつ de の非出現.

Pero, como soy cierto de tu limpieza de sangre e fechos, (Celestina, II, p. 86)「しかし私はおまえの血統と行ないの汚れのなさを確信しているので」

Porque soy cierto que esta donzella ha de ser para él ceuo de anzuelo o carne de buytrera (Id., p. 80)「というのは私は、この娘が彼にとってみれば、釣り針についた餌か鳶とり仕掛けにのせた肉になるというのは、確かだと思っているので」

No espero más aquí yo, fiadora que tú amanezcas sin dolor e él sin color. (Celestina, I, p. 258)「私はここでこれ以上は待ちません、おまえが痛みもなく朝を迎え彼が顔色もなく朝を迎えることを、信じているので」

3. 3. 内容節の先行要素としての名詞に続くべき de の非出現.

avré esperanza de folgar. (Calila, p. 143)「私は願いがかなうとの期待をもつであろう」

et yo he esperanza qu él será mejor servido que de otros algunos. (Id., p. 129)「私は彼が、他の誰からよりも、なおもっと手厚く奉仕されるであろうとの期待をもっている」

Yo te perdono, con condición que me vengues de vn cauallero, (Celestina, II, p. 167)「私はおまえを許してやる、私に代わってある騎士に仇討ちをしてくれるということを条件にして」

et después que la [la ley] tomare, deve aver fe que se salvará en ella. (L. Estados, p. 121)「彼がその[教え]を受け入れた後には、そこで彼が救われるのだという信念をもたねばならない」

quando vieres quel florido e verde árbol de todo seca, señal es que para el fuego se apareja, (Corbacho, p. 62)「おまえが花の咲いた緑の木がすっかり枯れてしまったのを見るときには、それは、火をたく準備が出来たことの印である」

que yo vieja soy, que no he temor que me fuercen en la calle. (Celestina, I, p. 260)「私はもう年寄りなので、外で手込めにあうなんて恐れはもっていない」

4. 『ドン・キホーテ』の場合

4. 1. 上記 2.1, 2.2. のリストの動詞が、『ドン・キホーテ』では直接補語として働く《De + Inf.》とどのように共立しているか、その実態を調査してみた。その結果を以下に示してみよう(それぞれの数字は、「個々の動詞の能動態での出現回数／前置詞なしでの不定詞との共立回数／《De + Inf.》との共立回数」の順序をとり, ref.は「全出現回数のうち、当該動詞が再帰動詞として《De + Inf.》を補語として伴う回数」を示す). (注13)

aborrecer	5 / 0 / 0 /	huir	27 / 1 / 1 /
acabar	171 / 71 / 71 /	jurar	50 / 7 / 7 /
acordar	66 / 8 / 8 (5, ref.) /	merecer	49 / 14 / 0 /
acostumbrar	1 / 1 / 0 /	negar	27 / 1 / 0 /
amar	18 / 0 / 0 /	olvidar	21 / 0 / 0 (3, ref.) /
aprender	1 / 0 / 0 /	ordenar	28 / 1 / 1 /
cesar	17 / 4 / 4 /	osar	22 / 22 / 0 /
codiciar	1 / 0 / 0 /	pensar	232 / 62 / 2 /
comenzar	138 / 0 / 0 /	probar	31 / 0 / 0 /
curar	3 / 0 / 0 (1, ref.) /	procurar	73 / 49 / 0 /
dejar	393 / 156 / 74	prometer	65 / 18 / 16 /
denegar	2 / 0 / 0 /	proponer	14 / 8 / 8 /
desear	75 / 10 / 0 /	pugnar	3 / 0 / 0 /
desesperar	11 / 0 / 0 (3, ref.) /	querer	676 / 384 / 0 /
determinar	47 / 36 / 29 (1, ref.) /	recelar	4 / 2 / 1 /
dudar	13 / 1 / 1 /	rehusar	2 / 1 / 0 /
entender	169 / 6 / 0 /	sufrir	17 / 0 / 0 /
escusar	14 / 0 / 0 (2, ref.) /	temer	52 / 4 / 0 (1, ref.) /
esperar	103 / 7 / 0 /	votar	10 / 1 / 1 /
estudiar	1 / 0 / 0 /	acontecer	22 / 3 / 0 /
fingir	19 / 2 / 0 /	convenir	33 / 8 / 0 /
gozar	27 / 0 / 0 /	cumplir	59 / 1 / 0 /
gustar	26 / 9 / 9 /	pesar	11 / 5 / 4 /
holgar	16 / 0 / 0 (1, ref.) /	placer	15 / 0 / 0 /

4. 2. 以下に《De + Inf.》のいくつかの現れを挙げ、それに簡単なコメントを加えてみたい。

(9) que agora me *acabo de desengañar* de un engaño en que he estado todo el mucho tiempo. (p.53) 「私は、これまでずっと長い間というものに陥っていた過ちから、今醒めたばかりである」

(10) y Camila tan contenta de haber alcanzado a Anselmo por esposo,

que no *cesaba de dar* gracias al cielo (p. 400) 「カミラはアンセルモを夫と出来たことにとても満足して、天に感謝を捧げることをやめなかった」

- (11) aunque él quisiera (...) ver si estaban en sazón de trasladarlos del caldero al estómago, lo *dejó de hacer*. (p. 153) 「彼は、自分たちがそれら大鍋から胃袋に移し変えるためのまたとない時にいるのかどうかを試してみたかったけれども、それをするのを控えた」

- (12) para que se aparten y *huyan de caer* en semejantes despeñaderos (p. 179) 「彼等がその場を離れて、そのような絶壁から転落するのを避けるために」

- (13) saltó sobre don Quijote, y (...), no *dudara de ahogalle*, si Sancho Panza no llegara en aquel punto (p.597) 「その男はドン・キホーテに襲いかかったが、もしサンチョ・パンサがその時に駆けつけていなかったら、彼はドン・キホーテを間違いなく絞め殺していたことであろう」

- (14) Pues *pensar de no hacer* lo que tenía gana, tampoco era posible. (p. 245) 「つまりは、彼がしたいと思っていたことをしないでおうと考えることも、これまたできないことであった」

- (15) no por eso *recelo / de no alcanzar* desde la tierra el cielo. (p. 523) 「だからといって、私は地上から天国を得ることができないのではないか、といぶかっているのではない」

- (16) *acordó de acogerse* a su ordinario remedio (p. 102) 「彼は彼のいつもの手段に訴えることに決めた」

- (17) *determinaron de salir* a buscar el músico... (p. 330) 「彼等はその楽士を捜しに出かけようと決心した」

- (18) si *gustares de acorrerme*, tuyo soy. (p. 315) 「もしおまえが私を救ってくれるのなら、私はおまえのものになる」

- (19) cuando *juró de vengar* la muerte de su sobrino ... (p. 150) 「彼がその甥の死の仇討ちをすると誓ったときに」

- (20) que yo os *juro* por la fe de caballero y de cristiano *de no desampararos* hasta veros en poder de don Fernando, (p. 361) 「私は、騎士とキリスト教徒との信仰にかけて、あなたをドン・フエルナンドの腕

に託すまでは、決してあなたを見捨てないと誓います」

- (21) que yo os *prometo*, por la orden de caballero que recibí, *de faceros* satisfecho y pagado a toda vuestra voluntad. (p. 212) 「私は、私が授かった騎士道の心にかけて、すべてあなたのお気持ちを体して、あなたさまを満足させ、得心させることを約束いたします」
- (22) *propuso* Lotario *de no hacer* más de aquello que viese ... (p. 401) 「ロタリオは見るであろうこと以外にはしないでこうと決めた」
- (23) que yo os *voto* a tal *de llenaros* las márgenes y de gastar cuatro pliegos en el fin del libro. (p. 57) 「私は、神にかけて、余白をぎっしりと埋め、本の終わりでは四丁の紙を使いきる、と誓います」
- (24) y no me *pesa* mucho *de ir* a ellas [galeras] (p. 272) 「私には[ガレー船]に行くのは、大して悲しいことではない」
- (25) a) tengo libre condición y no *gusto de sujetarme*. (p. 188) 「私は自由な身分で、それにまた、私は頭を下げるのは好きではない」
 b) pero no *gusto* yo *de los golpes de* que mi padre *gusta*. (p. 394) 「しかし私は、私の父がお気に入りの殴打を受けるのは嫌だ」
- (26) a) *prometí* contaros (p. 595) 「私はあなた方に話すと約束した」
 b) os *prometo* mi favor y ayuda (p. 596) 「私はあなたに庇護と援助とを約束する」
 c) y me *prometa* que no se ha de entremeter (p. 365) 「彼が私に、余計な口は出さないと約束するように」
- (27) que tenéis por costumbre *de habitar* en las espesuras de los montes (p. 308) 「おまえ達は山の奥深いところに住むのを習慣としている」
- (28) quizá le vendrá en voluntad *de acabar* lo que dejó comenzado, (p. 302) 「おそらく彼には、手をつけてそのままにしていることを終えてしまおうという気が起こることだろう」
- (29) Y será bien *dejalle* envuelto entre sus suspiros y versos, (p. 321) 「だから、彼をため息と詩行との間にくるまれたままにして、放っておくのがいいのだろう」
- (30) pues no es posible *vivir* una hora con quietud en él. (p. 547) 「というのは、一時間でもそこで静かにしているのが不可能なんだから」

(a) 用例 (9), (10), (11) の *acabar*, *cesar*, *dejar* が, 同じ意味のもとで, 単独の不定詞を直接補語として《De + Inf.》と交代させて用いることは, *cesar* の場合を除いてはみられなかった. 従って, *acabar*, *dejar* 二動詞の場合は, すでに, 「動詞 + de」を助動詞的な機能単位とするという動きが, 大きく進んでいるといえよう.

なお, これらの三動詞は, 不定詞との結びつき方の点では, 不定詞と直接に組む統語形式しかもたない *osar*, *querer*, 《De + Inf.》と組むことがまれな *pensar* のような動詞と対立的である.

(b) 用例(12), (13), (14), (15) の *huir*, *dudar*, *pensar*, *recelar* では, (a)とは違って, 不定詞そのものとも置き換えられる場合である. これらの動詞はまた, 個々の動詞の語彙的意味によって, 《De + Inf.》の *de* に具体的な意味を与えることも可能であろう. たとえば, *huir de...*, *dudar de ...* の *de* を, それぞれ, 「離反」「関連」を意味する要素として解釈しうる場合でもあるが, こうすれば, 機能単位としての《De + Inf.》は存立しえなくなってしまう. なおまた, このような解釈を優先させると, 必然的に, 前置詞の *de* が不定詞以外の名詞 (同等語句) と組んで構成する補語形式との関連をも考えなければならなくなるが, 本稿では, 可能なかぎり, 補文の現われ方の一形式として《De + Inf.》を扱うことにする.

(c) 用例(16) - (23) の《De + Inf.》についても, 基本的には(b)と同じコメントを行うことができる.

一つ(b)との違いは, このグループ内の動詞では不定詞を直接補語とするとき, これが《De + Inf.》として実現される比率が, 非常に高いことである.

もう一つ, このグループの動詞は, *gustar* をも含めて, すべて遂行動詞的な特徴をもつ, といえる. このような話者なり主語なりの特別な意志の働きに依存した動作を表わす直接補語, それを明示化する文法手段として, 17世紀のイスパニア語は伝統的な統語形式を残していた, ということなのであろうか.

ちなみに, このグループの動詞, *determinar* と *prometer* とについて, 問題の《De + Inf.》が, どのような状況下で用いられているかをみると, 以

下のようにになっている。

determinar は、叙述文 (20) に加えて、Cervantes の独白 (1), don Quijote (1), cabrero (1), Cardenio(ルシンドに恋する若い貴族: 3), cautivo(アフリカで虜囚の生活をしてきたキリスト教徒: 3), を主語とする対話文に現われ、prometer は、叙述文 (8) に加えて、muchacho (1), don Quijote (5), Sancho (1), cautivo (1) を主語として、対話文に現われてきている。

このような結果からみるかぎり、少なくとも、この統語形式が、叙述文にもまた対話文にも、また、社会的序列の違う人々を主語としても、用いられていることが分かる。

pesar, placer では、特定の人に生じる感情を、その人を間接補語で表わし、その情動の理由を主語にして表わす場合であるが、この場合の de にも上の (b) に示したような解釈は可能である。

(d) この (b)(c) グループの動詞の場合 de の付加を軸としても、直接補語 (ときには主語) の統語形式相互間の相補分布的な関係は成立しない。つまり、補語として現れる要素の文法範疇によって、前置詞 de の採非が決定されるという関係になってはいない。これは、(21) (26) にも明らかで、直接補語になる不定詞への de の付加は「任意」、といわねばならない。これは、(27), (28) のような複合的な構造の動詞についても同じである。

(e) 全体としては、『ドン・キホーテ』においては、中世イスパニア語の特徴的な現象の、他動詞の補文として現れる不定詞と等価の統語形式《De + Inf.》の後退がみえ、その分布が、中世イスパニア語に比べると、大きな狭まりをみせている、といえるであろう (注14)。

5. 関連する言語事実

5. 1. 上述した現象、de の非出現の点でも新たな方向がみえている。中世イスパニア語では、名詞がそれと同格に置かれた que 補文節を従えるとき、近代語とはちがって、二項目の並置が標準的な統語法であり、両者間に連結辞は現れなかった。しかし、これが、『ドン・キホーテ』ではかなり緩んで、伝統的な形式のかたわらに、《de + que》が現われ始める。この新しい形式の出現の有り様は、いくつかの名詞との組み合わせでは、以下

のようになっている。

(Que / De que)

aviso (1 / 0)	esperanza (0 / 2)
barruntos (0 / 2)	indicio, -s (3 / 0, 1 / 0)
causa (7 / 3)	necesidad (0 / 1)
confianza (1 / 0)	orden (4 / 0)
condición (1 / 0)	peligro (1 / 0)
ciudadano (1 / 0)	promesas (0 / 1)
ejemplo (0 / 1)	sospecha (2 / 2)
entendimiento (1 / 0)	temor (6 / 3)

(31) la fuerza de acomodar al propósito presente este romance (...) ha sido *causa que* sepáis mi nombre antes de toda sazón. (p. 86) 「無理をしてこの場の都合にロマンセの歌を合わせようとしたことが、あなた方が、それにみあった時よりも前に、私の名前を知ってしまうことの原因になった」

(32) que sea emperador y no arzobispo, porque le será más fácil, a *causa de que* él es más valiente que estudiante. (p. 325) 「彼は皇帝になるべきで大司教になるべきではない。というのは、彼は勉強好きというよりは剛胆者なので、そちらの方が彼にとってはなりやすいだろうからである」

5. 2. また、形容詞の補文についても、それが「que + 文」の形で現れる場合、連結辞としての *de* なしで *que* が使われる中世語のパターンに並んで、《*de + que*》も現われ始めている。

(33) Mas bien puede estar *seguro que* de aquí adelante no despliegue mis labios (p. 251) 「あなた確実だと思っていただけることは、今から先は私はこの唇を開かないということであります」

(34) *Cierto que* no me parece mal el título desta novela, (p. 398) 「確かに、私にはこの小説の標題は悪くはないと思える」

- (35) Bien puede la vuestra grandeza, (...), vivir, (...), *segura que* le pueda hacer mal ... (p. 440) 「もちろんのこと、あなた様はお過ごしになることができます、彼女があなた様に対して、悪事を働くのではないかなどのご心配はなさらずに」
- (36) *vive seguro de que* eternamente, / (...), / sus caballos aguije el rubio Apolo. (p. 62) 「おまえ堅く信じて生きよ、金色の髪のアポロが永遠にその馬を疾駆させていくということを」
- (37) estuvo atentamente escuchando todo lo que don Quijote decía, y, *celoso de que* la asturiana le hubiese faltado la palabra por otro, (p. 204) 「彼はじっとドン・キホーテがいつていることを聞いていて、そこで、そのアストゥリアスの女性がもう一人の男のために自分に嘘をついたということに嫉妬をして」
- (38) Entonces Clara, *temerosa de que* Luscinda no la oyese, abrazando estrechamente a Dorotea, puso su boca tan junto del oído de Dorotea (p. 523) 「そのときクララは、ルシンダに彼女の言葉が聞こえるのではないかと不安になって、しっかりとドロテアを抱き寄せて、彼女の口をぴったりとドロテアの耳につけて」

5. 3. 動詞の補語としての《de + que》

a) 動詞の補語にもこの《de + que》が現れる場合がある。ここでは、動詞そのものが本来の被制辞としてもつ *de* を維持しているといえる場合と、通常は、*de* を要求しない他動詞構造をとる動詞と組む場合、の二つがある。特に、後者では、以下にも触れるが *dequeísmo* の出現を確認することができる。

- (39) Pues lea vuestra merced alto, *que gusto* mucho *destas* cosas de amores. (p. 283) 「さてあなた様大きな声で読んでください、私はこのような恋の話のことごとがとても好きなのですから」
- (40) y si es *que* vuestra merced *gusta de que* yo vea algunas locuras, hágalas vestido, (p. 316) 「もしあなた様が、私にいかほどかの乱行を見せたいとお望みということなら、着物を着てそれをなさってください」

- (41) *yo holgaré de que se procure su remedio.* (p. 458) 「私は、彼への治療がなんとか試みられれば、嬉しいのですが」
- (42) *Ella se lo prometió, y la otra le calzó la espuela.* (p. 94) 「彼女は彼にそれを約束し、もう一人の女性は彼に拍車を履かせてやった」
- (43) *habéisme de prometer de que con ninguna pregunta, (...), no interrumpereis el hilo de mi triste historia;* (p. 292) 「あなたは私に、質問などをして私の悲しい身の上話の腰を折るようなことはしないと、約束してください」
- (44) *sepa el mundo, si acaso llegare a saberlo, de que Camila no sólo guardó la lealtad a su esposo, sino que le dio venganza* (p. 431) 「世間には、もし世間が何かのはずみで知ることになるのであれば、カミラはその夫への信義を守ったというだけでなく、夫に復讐をも果たしたということをも知ってもらいたい」

b) 前述のValdésは、次のように、補文を導く接続詞 *que* の削除の提案をしていた。

De refrán no se me ofrece ninguno que tenga este *que* demasiado, y creo lo causa la brevedad con que stán escritos, pero, si miráis en lo que leéis, hallaréis ser verdad lo que os digo en partes semejantes que ésta: *creo que será bien hazer esto*. Adonde aquel *que* stá superfluo, porque diría mejor: *creo será bien hazer esto*. (*op. cit.*, pp. 155-156) 「諺といっても私はこの余計な *que* を使っているようなものを一つも思いつきませんし、私は、それが無いのは、諺が書かれるときの簡略さに起因していると考えます。しかし、もしあなた方が読むものをよく注意して見ていたら、私があなた方にいっていることが、次のような箇所, *creo que será bien hazer esto* “私はこれをするのがいいと思う”, では本当に当てはまるということが分かるでしょう。つまり、そこでの *que* はいらないのです。というのは、*creo será bien hazer esto* とすれば、もっとすっきりした文になることでしょうから」

しかしこのValdésの記述は、近代語の傾向に逆行すると思われる。『ドン・キホーテ』でも、この *que* の省略現象は相当頻繁にみられるが、これは、節中の動詞が接続法の場合に大きな割合を占める。この場合には接続

法におかれた動詞そのものが、従属節としての資格を明示するので、もし *que* が補文の標識であるとすれば、それはまさしく “seperfluo” になるといえよう。この場合には、先行文にもう一つの文を、直接に、連続させて置いても、主文・従属文という構造は完全に保証されるからである（注15）。

- (45) *están rogando a Dios favorezca a los que poco pueden.* (p. 174) 「彼等は、力の弱い者達を庇護するよう、神に願っている」
- (46) *y rogaba a Dios, en su corazón, fuese servido de darle vitoria y que en ella ganase alguna ínsula* (p. 147) 「そして彼は、心の中で、どうぞ彼に勝利を与えられますように、また、その人がその勝利のなかでどこかの島を分捕ってくださるようにと、神に願った」
- (47) *y todos rodeaban a don Fernando suplicándole tuviese por bien de mirar las lágrimas de Dorotea, y que, siendo verdad, (...), lo que en sus razones había dicho, que no permitiese quedase defraudada de sus tan justas esperanzas.* (p. 453) 「そこでみなはドン・フエルナンドを取り囲んで、彼にどうかドロテアの涙を見てやってほしいと、また、ドロテアがその話しのなかでいったことが本当なのだから、彼女の当然しごくの期待が裏切られてしまうことのないように、配慮してやってほしいと嘆願した」
- (48) *porque él sabía detrás de un recuesto que cerca de allí se mostraba, había un valle de más yerva y mucho mejor ...* (p. 560) 「というのは、彼は、そこから近くに見えている坂の向こうに、あの谷間よりももっと草が生えもっと素敵な谷間があることを知っていたからであった」

5. 『ドン・キホーテ』についてのまとめ

5. 1. 『ドン・キホーテ』では、中世イスパニア語から続いていた補文形式の一つ 《De + Inf.》の *de* を削除して、不定詞だけをそれに当てるという意識の顕示化がみられる。

不定詞は多機能的な要素であることから、中世語では、その機能を明示化するような工夫が行われたもの当然である。その一つが、主語、補語に立つ場合の不定詞に、頻繁に定冠詞が付加されたという事実であろう

(para podernos demandar como lo hezimos e incusarnos *el* huyr, Celestina, II, p. 81「私達がそれをした方法を私達に尋ね、また逃げたことで私達を咎められるようにと」). 本稿で扱っている *de* も、おそらくは、機能明示化の目的で使われ始めたものと - たとえば「人的対格」に近い「不定詞対格」といえるような働き -, 考えられよう。しかしその使用は任意であったので、それだけに不安定な統語形式として推移したと考えられる。16・17世紀に入って近代語的な語順が固定化するとともに、不定詞の直接補語をわざわざ明示化する必要もうすれ、《De + Inf.》の *de* は、Valdés のいう余剰的な要素とみなされるようになった、といえる。『ドン・キホーテ』もこの変化の一端を映し出している。しかし、中世語では、この統語形式《De + Inf.》が「助動詞+動詞不定形」にまで及んでいると見なせるような場合もあって、これをみる限り、この形式はかなり強い力をもっていたもの、と推定される(E esto por experiencia lo podemos *de* cada día *ver*, Corbacho, p. 61「このことは経験で我々が日々に見ることができる」)(注16)。

こうした伝統的な統語形式《De + Inf.》に対立させて、名詞(同等語句)、*que/como* + 文の構造をもつ節、不定詞、の三つの形式の間の機能を同定化し、これによって、補文の諸形式をよりより合理的に整理しようとした、そうした動きを、この『ドン・キホーテ』にみることができると考えたい。

5. 2. この《De + Inf.》の現象と関連して、以下のいくつかの事実を指摘することができる。

a) 中世語の助動詞の系列には、動詞との組み合わせの面で複数の選択肢をもつものがあつた(*haviendo proseguir lo comiençado*, Corbacho, p. 280「始めたことを引き続き行なわねばならないので」; e *dél avemos a recebyr sentencia*, Id., p. 273「そして彼から我々は刑の宣告を受けることになる」). この系列で標準的になる形は、「haber / tener / deber + *de* + 不定詞」であるが、『ドン・キホーテ』にまだ以下のような構造が残っていることをみると、たとえば、「tener + *de* + 不定詞」を始め、その他の助動詞として働く「動詞 + *de*」の形式の出発点も、ここで扱っている《De + Inf.》にある、といえるかもしれない(注17)。

- (49) parece que de industria las[alabanzas] pasa en silencio; cosa mal hecha y peor pensada, *habiendo y debiendo ser* los historiadores puntuales, verdaderos y no nada apasionados, (p. 144) 「彼はそのほめ言葉には触れずに無視しているようである。しかしこれは不適切で考え違いのことであって、歴史家は、正確をむねとし、真実を語り、情に左右されない人のはずであり、またそうあるべきである」
- (50) ¡Acude, Sancho, y mira lo que has de ver y no lo *has creer*! (II, p.143) 「サンチョよ、さあ、やって来い、そして見るには見ても信ずべきではないものを見よ」
- (51) Pero ésta fue mi suerte y ésta mi malandanza; no puedo más: *seguirle tengo*. (II, p. 298) 「しかしこれが私の運命、これが私の運のなさでありました。私はいかんとできません。今は彼について行くだけです」

なお、これらはすでに少数例であることを付記しなければならない。一方これと対立的に、「acabar / dejar + de + 不定詞」は、すでに中世語でも早くから、それぞれの形で固定化して現われてきていることを、再度確認しておきたい。

b) Que は、すでに13世紀後半の散文から、補文導入辞としての働きに加えて、その余剩的用法が激しく、これが16・17世紀まで絶えることなく続いている。このような傾向に対して、Valdés はその見解を述べ、“superfluo” と決めつけたものと推定される。しかし、『ドン・キホーテ』では、基本的には、補文導入の要素としての que を削除する姿勢にはない。

それどころか、この que を補文導入のための標準的な手段として固定化させ、新しく現われ始めた連鎖「de que」を発達させ始めていることに注目すべきであろう。とはいっても、名詞節を導く接続詞の que は、16・17世紀では、いまだ、前置詞の de と共立しにくかったことも確認される (En los siglos XVI y XVII se omitía el *de* antes de *que*, y algunas veces antes de *si*; Cuervo, I, p. 678 「16・17世紀においては que の前では、かつまた時には *si* の前でも、*de* が省略された」)。しかし関係代名詞の場合は、この制限はみられなかった (sope yo por él muchas cosas que pertenescen a la ca-

vallería, *de que* yo non sabía tanto, porque só clérigo 「私は彼から騎士道に関する多くのことを知ったのだが、それについては、私が僧侶なので、私はあまりよくは知らなかった」 L. Estados, p. 100).

しかしながら、この傾向に対して、Cervantes は積極的に、《Que + 動詞定形》を、文の要素として名詞、不定詞と等価に位置付けようとしていることが分かる。ここから可能となる「de que」は、たとえば、que の機能明示化のうえでも、大いに効果を発揮したといえる。これは、以下にも明らかのように(下例, 54, 55), 接続詞 que を同一文中の関係代名詞 que と区別するための有効な手段にもなった。

- (52) En todo hay cierta, inevitable muerte; / mas yo, ¡milagro nunca visto!, vivo / celoso, ausente, desdenado y cierto / de las sospechas *que* me tienen muerto, / ... 「あらゆることには確実に避けられぬ死がひそんでいるが/しかし私は、かつてない奇跡として、生きている/悩み、あの人から離れて、蔑まれ/私を悩ませてやまぬ疑念をこの身に覚えて/...」 (p. 182)
- (53) la sospecha *que* tengo *que* algún descuido mío engendró en ti tan desvariados pensamientos es la que más me fatiga 「私の何らかの不注意が、おまえの心の中にそんなにも常軌を逸した考えを生み出したのではないか、という疑念が私から離れなくて、これが私の気持ちをすっかり打ちのめしている」 (p. 434)
- (54) conozco que son verdaderas las promesas *que* me ha dado *de que* (...), me hablará en la recámara, 「私は、奥の部屋で私と話しをするからといった彼の私への約束の言葉は、間違いないものだと分かっている」 (p. 426)
- (55) aunque tenía barruntos, y casi promesas ciertas, *de que* en la primera ocasión que se ofreciese sería promovido a capitán. 「彼は、考えられる一番早い機会に大尉に昇進させてもらえるだろうとの予感、いや、確実な見込みらしきもの、を感じていたが」 (p. 477)

c) 現代イスパニア語の特異な現象といわれる, Dequeísmo, Queísmo, もここに扱った現象の延長線上にある, と考えたい. dequeísmo について

は、次のような定義ができる。

Dequeísmo : Error gramatical muy extendido que consiste en anteponer la preposición *de* a la partícula *que* cuando introduce oraciones completivas, dependiendo de verbos como *creer, pensar, considerar, opinar, decidir*, etc. : *Hemos decidido de que no iremos, ...* Este fenómeno está estrechamente relacionado con el queísmo, ultracorrección que consiste en la supresión de la preposición *de* cuando es necesaria: *No está seguro que le admitan.* (Vox 10, *Diccionario de lengua y lingüística*, Credsa, Bibliograf, Barcelona, 1992, p. 68) 「Dequeísmo: creer, pensar, considerar, opinar, decidir などのような動詞に従属させて、補文を導くときに、小辞 *que* に前置詞 *de* を前置するところに生じる、広範に拡がった文法上の誤り。たとえば、*Hemos decidido de que no iremos* “私達は行かないことに決めた”... のような場合である。この現象は queísmo, すなわち、*No está seguro que le admitan* “彼は自分が採用してもらえることが確かだとは思っていない”のように、前置詞 *de* が必要なのに、それを削除するところに生じる過剰訂正、と密接に関係している」

queísmo については、次のような定義がある。

Queísmo : Vicio de dicción gramaticalmente incorrecto, estrechamente unido al dequeísmo, que consiste en una ultracorrección, la omisión de un nexo que introduce una cláusula. Así, p. j. : *Está segura que vendrá* en lugar de *Está segura de que vendrá.* (Id., p. 205) 「Queísmo: 文法的には間違いとされ、dequeísmoと密接に関係している語法で、問題は過剰訂正、つまり節を導入する連結辞を省略するところに生じる。たとえば、*Está segura de que vendrá* “彼女は彼がきっと来ると思っている” に代えて *Está segura que vendrá* といったりすること」

これは現在では、イスパニアよりも中南米に広くみられる現象で、それぞれの場での社会的な評価も異なるといわれるが、以下にその具体的な場合を挙げておきたい。

- (56) *pero yo creo que es injusto, ¿no? me parece injusto de que ..., de que la gente estudie una carrera gratuitamente, y que después se vaya*

...「しかし私は思うんですけど、人がただで大学で専門の勉強をして、その後国を出ていってしまうのは、間違っていると、そうじゃありません、間違っているんじゃないかとね...」(Caravedo, p. 44)

(57) siempre se dice *de que* hay sistemas especiales e ... para bibliotecas podríamos decir bibliotecas esto ... 「いつも言われることですが、図書館には、つまり図書館といえる施設にはね、それ特別の仕事のし方があって...」(Id., p. 265)

(58) De tal manera *de que* ... notante no, *de que*, en el caso de Alemania que yo conozco, se recluta a los diplomáticos de carrera, (Id., p. 182) 「ですから、そうはいつでもですね、私が実際に知っているドイツの場合は、職業外交官がそれに採用されていますよ」

(59) y así pudo *enterarse que* existían manjares presidenciales y vinos preciosos ... (Ribeyro, pp. 28-29) 「そこで彼が悟ったことは、大統領用の料理と高級ワインとがあるのだ、ということだった」

(60) Le bastaba saber que era pariente del presidente (...) para estar plenamente *seguro que* aceptaría. (Id., p. 29) 「彼としては自分が大統領の親戚であると知っていたので、それで大統領が話を受けてくれるものと確信するのに十分であった」

(61) El *hecho que* esta ciudad perteneciera al 《Commonwealth》 me pareció un magnífico augurio. (Id., p. 34) 「この都市がイギリス連邦に所属しているという事実は、彼にとっては、またとない縁起のよさともえた」

(62) me parece verla, a ella, delgada, alta a *pesar que* yo soy bajo yo tengo la estatura de mi padre (Caravedo., p. 268) 「私は彼女の姿を本当に見ているような気がします、痩せて、背が高い姿をね、もっとも私といえば、背が低いですが、これは父の背丈をもらっているんです」

上にみる(56),(57),(58)は dequeísmo, (59),(60),(61),(62)は queísmo の代表的な用例であるが、前者は本稿の5.でとりあげた《de + que》の進展の結果の現代語における現われであり、後者は3.で言及した de の削除現象の、これまた、近代語への継承の結果、としてみることができる。ここに、少なくとも17世紀までは生きた統語形式として使われている《De + Inf.》

(“deísmo” といってもいいかもしれない) の存在を重ね合せると、この deísmo が後退終息しこれに代わって dequeísmo (近・現代語文法の枠内で適格とされる統語形式としての dequeísmo) が地歩を固め、同じく 17 世紀までは標準的な統語法の queísmo にとって代わった、そのような内部変化が生じた段階が、近代イスパニア語への移行の時を示す標識の一つになりうるものと思う。そうした意味で、もしイスパニア本国よりも中南米に dequeísmo, queísmo がより顕著であるとすれば、またこれまでみた事実のみ拠っていうとすれば、中南米のイスパニア語は、近・現代語に現れた傾向をより強く推し進めるという側面と、伝統的な形式を持続するという側面とを、あわせてみせている、と結論できるのではないだろうか (注18)。

注 記

- (1) 用例の出典とテキストについては、本稿末尾の「用例抽出に用いたテキスト」参照のこと。
- (2) たとえば, Valdés (1535) は, 冠詞の使用を説明するときに, Para el genitivo masculino tenemos *del*, diciendo *del hombre*, y para el femenino *de la*, diciendo *de la muger* (ed. José F. Montesinos, p. 38) のようにいっている。その他, 同様の記述が, Licenciado Villalón (1558) にもみられる (*Gramática castellana por el Licenciado Villalón*. Edición facsimilar y estudio de Constantino García, C.S.I.C., Madrid, 1971, pp. 15-17)。
- (3) ここで Salvá が例示している用例のうち, *ahorraréis del trabajo, hacia de señas; ofrecerse de proseguir; quedó de hacerlo así* は, 本稿での考察の対象とはならない形式である。
- (4) Miguel de Unamuno の手になるこの著述は, イスパニア王立言語アカデミアが, 中世イスパニア文学の文献学的研究を奨励のために, 1892年に, *Gramática y Vocabulario del Poema del Cid* という論題のもとに募集した懸賞論文に応募して, 彼が1893年に上梓し, アカデミアに提出したものであった。これに応募して提出された論文は4点で, そのうちのひとつが, Ramón Menéndez Pidal からのものであった。この論文が, 1908年から1911年にかけて, *Cantar de Mio Cid*, 3巻として出版される, あの記念碑的な著作の出発点になったといわれている。
- (5) 完結相を表わす「acabar + 不定詞」の形式の存在は中世語において確認されている (Yllera, 1984, 2.4.5.2., p. 196)。

- (6) 「desear de + 不定詞」の場合を見つけられなかったので、「desear + 不定詞」を挙げる。
- (7) 終結相を表わす「dejar + 不定詞」も、少数ではあるが、中世語で確認されている (Yllera, 1984, 2.4.8.2., p. 206).
- (8) 中世語の用例を見つけられなかったので、16世紀の用例を挙げる。
- (9) 「negar + de + 不定詞」で、《De + Inf.》として扱える場合を見つけられなかったもので、ここでは、「negar + 不定詞」の組み合わせを挙げておく。
- (10) この用例の *quiso ... de mostrar* は、*quiso ... demostrar* かもしれない (Seradilla Castaño, 1996, p. 148).
- (11) 中世語においてしばしば《De + Inf.》が現われてくる構造であるが、この場合に、その出現と直前に位置する名詞の意味範疇とが関係しているかどうかについては、いまのところ、確定的なことがいえないのが残念である。
- (12) この文構造での《De + Inf.》の出現によって、不定詞構文と 'tough' 構文との区別が曖昧になってしまうことがある。たとえば、この *Calila* からの引用例はどちらの構造として解釈すべきであろうか。なお、次例は tough 構文になる。
- (13) ここで底本として用いたテキストは、参考文献にも挙げている、Miguel de Cervantes Saavedra, *El ingenioso hidalgo don Quijote de la Mancha*, I, II. Edición, introducción y notas de Luis Andrés Murillo, tercera edición, Clásicos Castalia, Castalia, Madrid, 1985 である。また、本稿では、正篇のみを考察の対象としたので、数字は上記テキスト、I のページ番号を示す。
- なお、2.1., 2.2. のリストに挙げた動詞のうち、*asmar*, *começar*, *cuidar*, *denegar*, *desconfiar*, *guisar* は、調査した範囲内では、動詞としての使用がみられなかったので、この頻度数表には含めなかった。また、*vedar* (1 回だけ使用) は、紙面の関係で同表から省いた。
- (14) 動詞の補語に用いられる不定詞に前置詞 *de* が先行する現象は、汎ロマンス語的事実であることが、古くから指摘されてきている (Dans toutes les langues, l'infinitif-régime peut ensuite être également uni par *de* au verbe dont il dépend. Les débuts de cet usage remontent à la période préhistorique. Meyer-Lübke, W., 1890-1906, III, §389, pp. 433-435). なお、その後の個々の言語におけるこの「*de* + 不定詞」の扱い方は、大きく違っていて、たとえば現代語では、フランス語 (*Il est honteux de mentir*; *Jean m'a promis de rentrer pour le dîner.*) と、イスパニア語 (*Es vergonzoso mentir*; *Juan me ha prometido regresar para la cena.*) とでは、まさに対照的である。
- (15) Cervantes は、実に軽妙で魅力溢れるイスパニア語を編み出したが、そこには名詞節

を導く *que* の省略やその余剰的使用が、与って大きな力を発揮していると思われる。この *que* の省略現象をも含めての *que* の用法は、Cervantes のイスパニア語の記述を行う際の大きなテーマである (Angel Rosenblat, 1971, pp. 291-295)。

現代語では頻繁な現象ではないが、*que* の省略は、意見の動詞、感情の動詞の直接補語節では認められているようである (El opina [*que*] no debemos ir; Siento [*que*] no hayáis llegado a tiempo; María Moliner, *Diccionario de uso del español*, Gredos, Madrid, 1994, II, p. 900)。このような解説に対して、この現象は文体的な手法の一つであるとし、特にこれが書簡体に現れると、説明しているものもある (Le ruego [*que*] se sirva tomar nota; Manuel Seco, *Diccionario de dudas y dificultades de la lengua española*, Espasa Calpe, Madrid, 1987, p. 314)。

なおこの Valdés の主張が現実に行われている場合が、現代メキシコの民衆語に特有の現象としても報告されている (Marina Arjona, “Comportamiento sintáctico de algunas construcciones propias del habla popular mexicana” en *II Encuentro de lingüistas y filólogos de España y México*, Ediciones Universidad Salamanca, Salamanca, 1994, pp. 321-323)。

(16) 但し、この用例との関連では、*Tanto lo dixo públicamente de cada un día*, (Corbacho, p. 122) のような成句もみられる。

なおこの部分は他の校訂本では *de cada día* となっている (ed. Michael Gerli, Cáteara, Madrid, 1981, p. 146)。こうなると機能単位としての《*De + Inf.*》は成立しなくなってしまう。

(17) 歴史的に遡ってみると、近・現代語での、助動詞や助動詞的に働き不定詞と組む動詞は、その多くが、不定詞との組み合わせでは、複数の形式をもっていたことが確認される (*aver + inf.*, *aver a + inf.*, *aver de + inf.*; *tener + inf.*, *tener + a + inf.*, *tener de + inf.*; *començar + inf.*, *començar a + inf.*, *començar de + inf.*; *ir + inf.*, *ir + a + inf.* など)。

(18) *Dequeísmo*, *queísmo* については、中南米イスパニア語についての古典的名著, Kany, Charles E. (1976), pp. 408-411, に詳しい記述がある。この現象は近年研究者の関心をひくテーマの一つとなっていて、すでにいくつかの地域についての研究の成果が発表されている。イスパニア側から現象を観察したものには, Gómez Torrego, L., “Reflexiones sobre EL《DEQUEISMO Y EL QUEISMO》en el español de España”, en *Español Actual* (56, 1991), Instituto de Cooperación Iberoamericana, Madrid, pp. 23-44 がある。

これ以外に, Mc. Lauchlan, Jessica, “*Dequeísmo y queísmo en el habla culta de Lima*”, en *Lexis*, VI, 1 (1982), Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima, pp. 11-55 ; Rabanales, Ambrosio, “*Queísmo y Dequeísmo en el español de Chile*”, en *Homenaje a Angel Rosenblat en sus 70 años*. Estudios filológicos y lingüísticos, Instituto Pedagógico, Caracas, 1974, pp. 414-444, Vaquero de Ramírez, M., *El español de América*, II, Arco/Libros, Madrid, 1996, p. 34, などがある。

R.A.E., *Esbozo* (1991) は, Cervantes の *queísmo* から始めて, *dequeísmo* にも言及し, あわせて, 直接補語になる不定詞に *de* を前置するのは, 俗語形式であると断定している

(No me hagas de reír, p. 522). これに関していえば, R.A.E., *Diccionario de la lengua española* (21ª edición, 1992) は, hacerse uno de rogar を挙げているが (p. 1083), María Moliner (1994) は hacerse rogar をとっている (II, p. 15).

参 考 文 献

Alonso, Martín (1986) : *Diccionario medieval español*, I, II, Universidad Pontificia de Salamanca, Salamanca.

Bassols de Climent, Mariano : *Sintaxis latina*, I, II, C. S. I. C., Madrid, 1963.

Bello, Andrés (1945) : *Gramática de la lengua castellana* (Ed. con observaciones de Niceto Alcalá - Zamora y Torres), Sopena Argentina, Buenos Aires.

Cano Aguilar, Rafael (1977-78): “Cambios en la construcción de los verbos en castellano medieval”, *Archivum*, XXVII-XXVIII, pp. 335-379, Universidad de Oviedo, Oviedo.

——— (1984) : “Cambios de construcción verbal en español clásico”, *Boletín de la Real Academia Española*, T. LXIV , C. CCXXXI-CCXXXII, R.A.E., Madrid, pp. 203-255.

——— (1981) : *Estructuras sintácticas transitivas en el español actual*, Gredos, Madrid.

Cervantes Saavedra, Miguel de: *El ingenioso hidalgo don Quijote de la Mancha*, I - III, Edición crítica y comentario de Vicente Gaos, Gredos, Madrid, 1987.

——— : *El ingenioso hidalgo don Quijote de la Mancha*, I, II. Edición de Luis Andrés Murillo, Clásicos Castalia, tercera edición, Castalia, Madrid, 1984.

Cuervo, R. J. (1994) : *Diccionario de Construcción y Régimen de la lengua castellana*, tomos I-VIII, Instituto Caro y Cuervo, Santafé de Bogotá.

Gili Gaya, Samuel (1985): *Curso superior de sintaxis española*, décima edición, Bibliograf, Barcelona.

Gómez Manzano, Pilar(1992) : *Perífrasis verbales con infinitivo (Valores y usos en la lengua hablada)*, Universidad Nacional de Educación a Distancia, Madrid.

Hernanz Carbó, María Luisa (1982), *El infinitivo en español*, Departamento de Filología Hispánica de la Universidad Autónoma de Barcelona, Barcelona.

Kany, Charles E.(1976) : *Sintaxis hispanoamericana* (versión española de M. Blanco Alvarez), Gredos, Madrid.

Keniston, Hayward (1939) : *The Syntax of Castilian Prose*, The University of Chicago Press, Chicago.

Meyer-Lübke, Wilhelm (1974) : *Grammaire des langues romanes*, II, III, Laffitte Reprints, Marseille. Réimpression de l'édition de Paris, 1890-1906.

Nebrija, Antonio de : *Gramática de la lengua castellana*. Estudio y edición de Antonio Quilis, Ramón Areces, Madrid, 1989.

Real Academia Española (1991) : *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Espasa Calpe, Madrid.

Rosenblat, Angel (1971) : *La lengua del “Quijote”*, Gredos, Madrid.

Salvá, Vicente : *Gramática de la lengua castellana*, estudio y edición de Margarita Llisteras,

I, II, Arco/Libros, Madrid, 1988.

Serradilla Castaño, Ana M. (1996) : *Diccionario sintáctico del español medieval, verbos de entendimiento y lengua*, Gredos, Madrid.

Unamuno, Miguel de (1977) : *Gramática y glosario del Poema del Cid*, Espasa-Calpe, Madrid.

Valdés, Juan de : *Diálogo de la lengua*. Edición y notas por José F. Montesinos, Clásicos Castellanos, Espasa-Calpe, Madrid, 1953.

Villalón : *Gramática castellana por el Licenciado Villalón*. Edición facsimilar y estudio de Constantino García, C.S.I.C., Madrid, 1971.

Yllera, Alicia (1980) : *Sintaxis histórica del verbo español: Las perífrasis medievales*, Universidad de Zaragoza, Zaragoza.

用例抽出に用いたテキスト。() により出典を表示.

Alfonso el Sabio, *Primera crónica general de España*, publicada por Ramón Menéndez Pidal, tomos I y II, Gredos, Madrid, 1955. (P. C. G.)

Obras de Alfonso X el Sabio (Selección). Edición de Francisco J. Díez de Revenga, Taurus, Madrid, 1985. (Alfonso X)

Alfonso Martínez de Toledo: *Arcipreste de Talavera o Corbacho*. Edición de J. González Muela, Clásicos Castalia, Madrid, 1970. (Corbacho)

Calila e Dimna. Edición de J. M. Cacho Bleuca y María Jesús Lacarra. Clásicos Castalia, Madrid, 1984. (Calila)

Caravedo, Rocio : *El español de Lima*. Materiales para el estudio del habla culta, Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima, 1989. (Caravedo)

Cervantes Saavedra, Miguel de: *El ingenioso hidalgo don Quijote de la Mancha*, I, II. Edición de Luis Andrés Murillo, Clásicos Castalia, Madrid, 1984.

Don Juan Manuel: *El Conde Lucanor*. Edición de José M. Bleuca, Clásicos Castalia, Madrid, 1971. (C. Lucanor)

———: *El Libro de los Estados*. Edición, introducción y notas de Ian R. Macpherson y Robert Brian Tate, Clásicos Castalia, Madrid, 1991. (L. Estados)

El Evangelio de San Mateo, según el manuscrito escurialense I.1.6. Texto, gramática, vocabulario por Thomas Montgomery, Anejo VII de BRAE, R.A.E., Madrid, 1962. (San Mateo)

Fernando de Rojas: *La Celestina*, I, II. Edición, introducción y notas de Julio Cejador y Frauca, Clásicos Castellanos, Espasa-Calpe, Madrid, 1972. (Celestina)

Poema de Fernán González. Edición, prólogo y notas de A. Zamora Vicente, Clásicos Castellanos, Espasa-Calpe, Madrid, 1954.

Ribeyro, Julio Ramón : *La palabra del mudo*, antología, Ed. Milla Batres, Lima, 1972.

本稿は、1997年12月25日の関西スペイン語学研究会で発表した小論を訂正、加筆したものである。当日、つたない発表をお聞きいただき、いろいろコメントくださった学兄諸氏に、深く感謝を申し上げる。1998年2月25日。